

# 金剛寶戒寺便



令和八年四月一日発行 第一四五号

檀信徒の皆様、こんにちは。最近では「日本には四季ではなく、二季（夏と冬）しなくなつたようだ」と仰る方もおられますが、桜の花が美しく咲くこの短い季節こそ、一年で最も過ごしやすく、心が和む時節かもしれませぬ。

去る三月八日、恒例の「巡回布教」を執り行いました。日曜ということもあり、三十名を超える多くの皆様にご参加いただき、賑やかな法要となりました。今年も金沢より寶泉寺住職・辻雅榮僧正をお招きし、「ぼさつこのころ」と題してご法話をいただきました。

## 【ぼさつさまはどこにいる？】

「菩薩（ぼさつ）」と聞くと、お寺の台座にいらつしやる尊像を思い浮かべる方が多いでしょう。しかし辻先生は、「誰かのために心を尽くして動く人こそが、生きた菩薩さまである」と教えてくださいました。

## ■ 自分のことより「町の復興」を

震災で大きな被害を受けた、あるお寺のご住職のエピソードです。ご自身のお寺も甚大な被害を受け、辻先生が「早く直さないとダメせんね」と声をかけられました。すると、八十年代後半のご住職は笑顔でこう答えられたそうです。

「お寺の修理はいつでもいい。私は百二十歳まで生きるつもりだからね。それより今は、困っている町みんなのために、復興を先にしならん」自分のことは後回しにし、まずは他者の苦しみに寄り添う。その「見返りを求めない慈悲の心」に、私たちは真の菩薩の姿を見ることができます。

## ■ 足を洗い、心を通わせる

辻先生ご自身も、長年被災地で「足湯ボランティア」を続けておられます。冷えた足を温め、丁寧に洗う。それは単に汚れを落とすだけでなく、相手の孤独や不安を丸ごと受け止める行為です。一日に十人もの被災者を対応するとクタクタになってしまうそうです。けれども、足を洗ってもらった方々が、「なんだ心が救われた。私もまだ何かできそうだ」と生きる希望を取り戻していく。そのような言葉に糧に続けている。またこの「足湯ボランティア」は私たちが毎朝行う行法と同じようだと別の場所で話して下さったのがとても印象深かったです。

## 【菩薩さまの四つのふるまい（四摂法）】

辻先生は、私たちが日常で「ぼさつさま」に近づくための四つの心得を教えてくださいました。

- ① 同じ立場に立つこと（相手と同じ目線で向き合う）
- ② 相手の望むことをすること（自分の都合ではなく、相手の必要を優先する）

③ 優しい言葉をかけること（あたたかな言葉で、相手の心を癒やす）

④ 見返りを求めないこと（「してあげた」と思わず、ただ寄り添う）

## 【あなたも、私も「ぼさつさま」】

私たちは誰かに助けられた時、その人に「菩薩」を感じます。それと同時に、私たちが誰かに優しい言葉をかけ、手を差し伸べる時、その瞬間の私たちは「ぼさつさま」になっているのです。戦況が伝わる落ち着かない日々ですが、こんな時こそ「おかげさま」と「ありがとう」が響き合う、温かな日々を一步ずつ歩んでいきたいものです。

## ○法話の会

五月八日（金曜日）十四時より

○写経の会 会費千円

五月二十四日（日曜日）十四時から

○ワークショップ（千円）と陶器販売

五月二十八日（木）十三時三十分から

ワークショップは昨年もお好評いただいた古田さんを講師にお迎えし、愛らしい「お地藏様のお人形」作りを学びます。あわせて、同じ工房で製作されている歳納さんの陶器の販売も行います。当山の「写経の会」でも使っているコーヒーカーップなど、使い勝手の良い器が大変リーズナブルに並びます。皆様の食卓に、お気に入りの一脚をいかがでしょうか。詳細はお問合せ下さい。

合掌